



こんな映画を観てきた

ひまわり

1970 伊

監督: ビットリオ・デ・シーカ
★ソフィア・ローレン
★マルチェロ・マストロヤンニ

エンディング間近で登場した赤ん坊、ソフォア・ローレンのお子さんだったような記憶が… とすると、父親は製作者たるカルロ・ポンティ氏ということに!!

昭和の“沁みる”唄

夢は夜ひらく

唄: 園 まり

雨が降るから 逢えないの
来ないあなたは 野暮な人
ぬれてみたいわ 二人なら
夢は夜ひらく

長い時間、“BGM”がわりに流しておくには、藤圭子よりこちらの方が宜しかろう。耳と心にやさしい歌声ではあった。

10.August.2021

Vol.27

お楽しみはこれからだ 8月は『向日葵（ひまわり）』

YAH!

ヤー！ YOU AIN'T HEARD NOTHIN' YET!

『ひまわり』 こんな映画を観てきたー(1970伊/SUNFLOWER)

「ひまわり」といえば、ビットリオ・デ・シーカ監督、ヘンリー・マンシーニ音楽の、ズバリ！イタリア映画『ひまわり』である。あのウクライナのひまわり畑の映像に、これ以上はないだろうと思われる心揺さぶる音楽が流れると、こちらの涙も溢れ出し、とめどなく流れ続けることに相成る。ソフィア・ローレンとマルチェロ・マストロヤンニの“名人芸”にも助けられて、リュドミラ・サベリエワの可憐さが更に際立ち、映画史に残る“泣かせる”作品となった。もともと、苦勞

の末に行方不明の亭主を見つけたものの、残酷な現状を大人の対応で身を引くべく、列車の飛び乗ったところで“fin”マークが出れば完璧だったが、その後のまさに“後日談”のような部分は要らなかったかもしれない。

このひまわり畑の地下には、東方戦線で散っていったイタリア兵たちの屍があったことを忘れてはならない。

そして、瓦礫が残った(遺った)…

“起死回生”を目論んで強行したはずのオリンピックが終わった。とても無事に…などという結果ではないだろう。何かの番組で、「感激と興奮の祭典が終わって、後に“瓦礫”の山が残る(遺る)、誰がそれを片づけるのだろう」と或るコメンテーターの発言である。日々の状況をみても“乾坤一擲”の大勝負に失敗、そう言わざるを得ないだろう、責任者は文字通り無責任では済まされない。祭のあとの静けさ、気だるさは詩になるが、騒乱の後の狂乱、大勢の啼くものと蔭で嘔うもの、格差は開き、世は分断がさらに進むのだろう。一時的な事であってほしい、そう信じたからこそ

我慢もできた。ところが、今となっては誰も信じられない、指示、指導などもつてのほか、誰がそんなこと聞けるものか…

“自己責任”は当然だが、「酔いをさましに出た類に そつといとしむかわやなぎ こんな情けが 人にもあれば」なんて古い演歌の歌詞が妙に心に沁みて、もつと何か手があったろう、今からでも遅くない、策はあるだろうと思ってしまうのだ。